

西淀川記憶あつめ隊

Vol.18

2017年1月13日
聞き取り

黒田 主税 さん

お店の前で記念撮影

黒田主税さんは、1939年福井県生まれの佃にある豊屋さんです。

◆豊屋になりたい

中学生のころに、友人たちと豊屋の手伝いをして、アイスクャンデーをもちょうという経験があった黒田さんは「豊屋になりたい」と強く願うようになります。中学卒業後、野田の中央卸売市場にある和菓子屋に就職しました。そこは、結婚式や法事の引き

菓子を作る大きな工場だったそうです。しかし、豊屋になりたい黒田さんは、半年後に野田から2号線を神戸方面に歩き、通り沿いの豊屋に一軒一軒「見習いをしたい」と扉をたたきました。

尼崎の豊屋に「見習い募集」の張り紙がありました。働くには身元保証人が必要で、走って野田まで帰って兄弟子を連れていき、その兄弟子が豊屋にいた職人と同郷ということ、身元保証人問題が解決し、晴れて豊屋の見習いになったそうです。

◆尼崎修業時代

当時は、尼崎製鋼が炭鉱労働の失業者を大量に受け入れており、早急に社宅が必要な状況にありました。5〜6人の職人が24時間体制で豊を作り続け、社宅に納品しました。社宅は43号線になった場所にあつたとのこと。黒田さんは店の上に住み込んで、親方の息子と同室

で寝起きし、家族と職人のご飯の支度もしていました。豊がたくさん必要な時期だったので、見習いでも豊を縫っていたため、一人前になるのが早かったそうです。「遊びに行つて映画見るよりも、豊を縫うことが楽しかったなあ」と少年のような笑顔で語ってくれました。

◆吹田、天神橋、佃へ

尼崎の修行が終わった後、吹田でより高度な技術を学ぶための修行を続けます。お寺用の豊である「紋縁」や、茶室の豊などの技術を習得した後、1963年に天神橋筋5丁目で店舗を構えることとなりました。ところが、

佃で豊職人をしていた兄弟子から「故郷に帰るので、代わりに働いてほしい」と頼まれ、自分の店を閉めて、佃2丁目にあつた豊屋で働くことになりました。1967年には佃3丁目の現在の場所自分の店を開業し、今日に至ります。今年の6月に開業50周年です。現在も、尼崎の寺町に豊を収めたり、現役で仕事をしています。

◆佃美商店街があつた

佃3丁目の店がある周辺は、大阪機械の社宅が20件ほどありましたが、大阪機械（現在のスカイハイツ）が地盤沈下で精密機械が置けなくなり、移転したことで、空き地になったところを黒田さんが購入したそうです。「昔はマンモスセンターもあつて、

ここら辺は佃美商店街として、すべてがそろうにぎやかな場所だったけれど、マンモスセンターが千船駅の高架化に伴つて、駅下に移転してからはさみしくなった」とのこと。



東日本大震災釜石応援ツアーにて、豊アートを峠の茶屋の静子さんへプレゼント

◆長持ちしすぎる豊

阪神大震災のあと、2〜3年は忙しかったそうですが、そのあとは大型豊店が主流となり、仕事が減ったといえます。「昔は米



東日本大震災釜石応援ツアーにて、流木撤去のボランティア。「まだまだ大学生より働けるよ」

屋と豊屋の仕事がなくなるなんて思いもしなかった。豊の上で生まれて豊の上で死ぬ生活から、ベットの上で生まれてベットの上で死ぬ生活に変わってしまった」と時代の変化を語ってくれました。

国産の最高の豊表を使う黒田さんの豊は「長持ちしすぎる」といいます。顧客も1500件あり、最近の仕事は豊の張り替えが多く「ぼろぼろの豊をサラみたくて修理して喜ばれるのがうれしい」という黒田さん。最近では、豊表を利用した「豊アート」にもいそしんでいます。黒田さんの豊愛に癒されたピアリングでした。林